

授業紹介

2012年後期「表現・表象文化論演習Ⅱ」

「表現・表象文化論演習Ⅱ」では、2011年度から表現文化学教室の小田中、海老根、それにアジア都市文化学の中川眞教授の3名の指導体制によりアーツマネジメントに関する演習を行っている。この演習は、

「アーツマネジメントとは、芸術と社会をつなぎ、アーティストと一般の人々のあいだの出会いと協働を組織する仕事です。この演習では、講義、ワークショップ、実習を交えて、アーツマネジメントの基礎を学びます。」(同演習シラバスより抜粋)

というもので、表現文化学教室としては初めての課題解決型授業である。

授業がスタートした2011年後期には、二つの班がそれぞれ市大再発見をテーマとした写真展(生協食堂)および大和川でのゴミアート展示という二つの企画を行った。なにぶん初めての試みだったので学生諸君の苦勞も大きかったが、次の学年につながる成果を挙げることができた。

2012年度の授業では前年度の経験を踏まえた上で、二つの班が「市大エコキャンドルナイト」(杉本キャンパス南部ストリート)ならびに「上って楽しむこども階段展覧会」(学術総合情報センター1～5階階段)という企画を実現させた。

どちらの企画も予想以上の大きな成果を挙げ、大阪市大学における表現文化学教室の存在を印象付けることができた。企画の実施に際しては前年度の演習の受講者を含め、表現文化学教室に所属する学生を初めとして、多くの人々の協力を得た。以下に掲げるのは、これら二つの班がそれぞれの企画を振り返った報告である。授業に参加あるいは協力した学生たちの努力に敬意を表したい。

(小田中章浩)

「市大エコキャンドルナイト」班 企画報告

キャンドルナイトを行った2日間で、私は他の授業にはない充実感を得ることができた。本番直前までどたばたで、不安もたくさんあったが、結果的に成功といえる形になったのは本当に幸せなことだ。今となってはこのようにまとめられるが、準備段階ではパニックに陥ることが多々あった。

企画はゼロからのスタートで、手本も資料もない。すべきことがたくさんあり、5人の役割分担をする暇もなく、できることに食らいつく勢いで準備を進めた。キャンドルはどうやって並べるのか、手伝ってもらえるのか、見に来てもらえるのか……構想が具体的になるにつれて考えることが増えていく。その都度メンバー全員が共通の認識をしているか確かめる。私たちは昼夜問わず頻繁に連絡を取り合った。それでも考えを共有するのは難しかった。そもそも目指すべきゴールがはっきりしていなかったので、当然のことかもしれない。並べるキャンドルの個数や瓶の色、南部先生についてのパネルの内容など、誰も正解が分からないことばかりだった。とにかく時間がなかったので、問題があってもいちいち話し合っていられない。勢いでキャンドルを買いに行き、持ち切れないほどの荷物量を見て店員に驚かれたこともある。空き時間を見つけては、メンバーのそれぞれが備品を買いに走りまわった。私たちだけでなく、家族や先生も巻き込んでどたばたしていた。

キャンドルナイトの企画の具体化に伴い、周囲の協力も増えていった。管財の方に相談したことがきっかけで、学長や大学の広報課、読売新聞の方にもお会いする機会ができた。さらに他学部の先生、学生の手助けを得ることもできた。この授業以外で、こんな経験をすることはないだろう。実現は厳しいと思われていたキャンドルナイトだったが、予想以上に大きな規模になり、私たち自身が困惑するまでになった。

当初の計画では、使用するキャンドルは1日300個、しかし実際は1日1000個に増量した。それだけの数のキャンドルを並べるのは本番にして初

めてだった。配置デザインをしてくれた生活科学部の1回生に指揮を頼んだが、当然本人たちもどうなるかわからない。当日手伝いに来てくれたみなさんがいなかったらあれほどの数を並べることはできなかっただろう。

火を灯したときの感動は何とも言えないものだった。南部ストリートを通る友達が声をかけてくれたり、地域の方が喜んで写真を撮ってくれたりすることが、嬉しくてたまらない。外での作業が続いたが、寒さや疲れは感じなかった。動きまわっていたせいもあるだろうが、炎を見ていると心から温まる感覚を覚えた。できるならずっとこんな風にキャンドルを飾っておきたい。そんなことを思いながら火を消した。

この授業を通して学んだことは、書ききれないほどたくさんある。なかでもいちばん強く印象に残ったのは、人とのつながりの大切さである。5人で立ち上げた企画だが、最終的にはたくさんの人の手が加わって実現することができた。もちろん人の数が増える分だけ予定の調整や意見をまとめることが難しくなるが、それも良い勉強になったと思う。最後に、この企画に関わってくれた人々に、心から感謝したい。

(本多真帆)

キャンドルナイト二日目を終えたとき、アーツマネジメントの授業を受講して本当によかったと心から思った。何もかもわからないことばかりで常に手探り状態のまま企画が進んでいたから、本当に苦しいことばかりだったが、その分それ以上のものを得ることができた。主に広報についての活動とそこで学んだことについて述べていきたいと思う。

南部ストリートの使用許可とそこでの火の使用許可を管財の方に頂くためにミーティングを何度か行ったのだが、まずそこで企画を持ちかける際、A4の用紙一枚に企画概要をまとめた報告書を作成すべきだ、ということ学んだ。一般的には当たり前のことかもしれないが、企画を自ら立ち上げることがはじめてであった私たちは初回のミーティングでは何も資料を用意していなかったのもので、後から振り返ると大変失礼なことをしていたなと思う。

キャンドルの配置デザインをしてもらおうアーティスト募集のために生活科学部居住学科の小池先生に協力していただいた。一回生にキャンドルナイトについての概要、要望のプレゼンを行う際、パワーポイントの作成や進行のレジユメも作り、リハーサルも入念に行うなど、人前で話す、ということの難しさも学んだ。

さらに、管財の方のご協力で、学長、副学長にまで企画の話が通り、20分程度の時間でキャンドルナイトについてプレゼンさせていただけることになった時も、話がだんだん大きくなってきていると不安に思いながらも、資料を何とか間に合わせて最終的には学長にもこの企画に大変興味を持っていただけるようなプレゼンをすることができた。

そして、今回の企画を進めていく広報という分野において、私たちが一番驚いて、緊張した経験は、なんと言っても読売新聞さんの取材を受けたと言うことだ。これも学長や管財さん、広報課の方の協力があって叶ったことであるが、自分たちの企画がまさか新聞に載る日が来るなんて思いもしなかったから、大変貴重な体験をさせて頂けて光栄に思った。しかし、それと同時にここまで話が大きくなってしまったからには、キャンドルナイトを大成功させなければならないというプレッシャーに日々悩まされるようになった。

ところが、そんな心配は初日準備段階で吹っ飛んだ。当日スタッフは皆さん指示通りにしっかり動いてくれて、大したハプニングもなく点火を迎えることができたからだ。キャンドル全てが点火したときの感動は言葉にならないものだった。大変なことばかりでお世辞にも私たちに企画力があつたとは言えない状況で、このような大きな企画を成功させることができたのはひとえに協力して頂いた方のお力添えによるものであるということに感動もひとしおであった。

アーツマネジメントの授業で学んだことは以上に述べたことの他にもたくさんある。言葉にはできないつながりやつよさ、責任……。本当にこの授業を選択して良かったと心から思う。

(藤原由子)

この授業から学んだことは数えきれない程たくさんあるが、ここでは特に準備段階から学んだことについて書いていく。

私がこの授業を受講してよかったと思う点の一つは、年度によって行う企画が変わることである。私はこの授業を受講するより以前に企画を行う機会があったが、そこでは毎年同じ企画が行われているため、メンバーの入れ替わりはあるが、ある程度企画の骨子が完成してしまっているため、どうしても方向性が制限されてしまっていた。しかし、この授業ではその年の受講者が発案した企画を行うため、全くの新しい状態から取り組むことができる。メンバー内に企画の経験者がいない状態でスタートできるので、全員が試行錯誤しながら企画を進めていくことができ、お互いに高め合う事ができたのではないかと思う。また、今回はメンバーが全員同回生であったこともあり、いい意味で遠慮することなく意見を言い合うことができたことは、座学の授業ではなかなか経験できないことであり、とてもいい刺激であったと思う。

準備段階では、何を優先して考えなければならないのか、いつまでに何を決めないといけないのか、交渉との関係で企画がなかなか進められないときにできることはないか、というように複数の課題を同時進行で考えなければならなかったため、目の前のことだけでなく企画全体を通して考えなければならぬことの重要性を感じた。また、個数や使用する備品などの最終的な決定をすることもその後の企画進行に関わってくることになるので、責任のいることであると感じた。また、この授業全体を通して最も強く感じたのは、人との繋がりの大切さである。準備段階でも私達メンバーだけでは手が回らないところがあり、先生に備品の買い出しに行っていたり、院生の方にはパネルの作成を手伝っていただいたり、当日スタッフの方もテスト前で忙しい時期であるにも関わらず、多くの方が手伝いに来て下さったりと、本当にたくさんの方に協力していただけたからこそ成功できた企画だったと思う。

(奥田有紀)

この授業はかなり革新的なものである。予算を与えてもらった上で自由に企画し、それを実現させる。文学部生にとって自らがこれほどまでに能動的に行動し、考える授業は今までなかったのではないだろうか。私はこの企画に携わるなかで、他のメンバーに頼るところが多く、自分の無能さを思い知った。反省すべきところがたくさんあった。

予算をはじめ十万円と提示されていたのだが、周囲の期待の高まりを受け企画の規模を大きくせざるを得ず、その予算内におさめることができなかった。しかし企画が終わり、かかった経費を詳しく調べるうちに、「これは借りることができたかもしれない」「これは結局不要だった」というような無駄がたくさん見つかった。準備道具に関してのリサーチ不足や情報不足、また時間に追われすぎて調べる暇がない、というのが大きな原因だった。これは私の大きな反省点である。

他のメンバーも述べているように、全てが手探り状態かつメンバーの役割分担もあいまいで、課題が見つかったから対応するという流れが主だったために時間に追われ、不安も大きかったのだと、終わってから気づいた。この結果から、何か企画を立ち上げるときには、立ち上げ時に役割分担し、その役割を責任もって全うすることが第一条件であるということを学んだ。

またこの企画の成功に際し大きかったのが、当日スタッフの方々の存在である。当日の準備は南部ストリートの掃除からはじまり、1000 個のキャンドルやレンガ並べ、点火という重労働だったにもかかわらず、総勢二十数名の人が手伝ってくださった。人通りが多い中で手際よく準備し、タイムスケジュールを守れたことは本当に当日スタッフの方々のおかげとしか言うほかない。不安を残して迎えた本番、1000 個のキャンドルがレンガ道の南部ストリートを照らす景色を見たとき、私は心から感動し、「この授業をとってよかった」と思った。

何か実行したい企画があるとき、自分の意思だけで進めることはできない。それは大学の中だけでなく社会でも同じだろう。さまざまな人との交渉や衝突、意見の食い違いは避けては通れない。だがその分だけ、成功し

たときの喜びや感動、また企画を通して得られる人脈もたくさんある。この授業を通じて、大学に対する見方も少し変わったし、自分の世界が広がったと思う。この経験を忘れず、今後に生かしていきたい。

(田中麻紀子)

まずは、今回のキャンドルナイトが無事成功して内心とてもほっとしている。広報の影響もあり一時はどうなることかと思うほどに話ばかり大きくなり、その中で本当に期待に応えられるだけのすばらしいものができるのか、といった不安とプレッシャーに何度も悩まされたからだ。最初は「キャンドルをただ並べるだけで本当に人が集まるのか？」と思ってさえいた。しかしこうした不安や悩みは、当日会場に足を運んでくださった人々の様子、そして回収したアンケートの内容を見るとすぐに消えてしまった。今ではこのキャンドルナイトの企画に携わって本当に良かったと思っている。

今回私はアンケートの集計、及び当日スタッフ対応を中心に行ったので、それについて述べる。まずは当日スタッフについてだが、これは直前までどれくらいの人数が必要かを具体的に割り出せていなかったのも問題ではあるが、本番になってみるとやはり人手が足りない部分もあり大変だった。しかし当日スタッフも自分がどう動くべきかを考えて行動してくれる人ばかりだったので、一番心配していた準備や片付けが予定よりもかなり早い段階で終了し、その点は良かったと思う。

アンケートの集計結果に関しては予想以上の回収率で、貴重な意見を多数集めることに成功した。やはり開催両日とも最も多いのは学生の参加者だが、教職員や市大OBの方々、また地域住民の方々など学生以外の参加者も非常に多くて驚いた。両日とも非常に高い評価をしていただき、また「今後このような学生企画が行われることを大いに期待している」といった意見も数多く見られた。スタッフの対応についてのお褒めの言葉もあり、大変だったけれど本当に企画して良かったと感じた。

今回のキャンドルナイトを経て私が学んだことは大きく分けて2つある。まず1つは、こうした学生企画に対して、先生をはじめ学校関係者の方々、

また周辺の地域住民の方々、そして先輩や友達といった学生が非常に好意的であるということだ。確かにいろいろな許可や申請の交渉などは大変ではあるが、皆この企画のために積極的に動いてくださった。こうした人々の支えがなければ、今回のキャンドルナイトの大成功はなかったと心から思う。そして2つ目は、自分はまだまだ成長しなければならない、ということである。企画中私は、授業の関係やアルバイトの関係で朝や放課後に行われるミーティングにほとんど参加できず、他のメンバーに甘えてしまっていた。参加できないなら、そこで今自分は何をすべきか、何ができるのかということ、周りを見て考え、行動しなければならなかったのに、それも不十分だった。そうした臨機応変さは、これから社会に出て行く上でさらに重要になってくる。だからこそ自分は、ある局面で適切な判断をして行動できるように成長しなければならないと思うのである。

このキャンドルナイトで学んだことは多すぎて、ここには書ききれない。しかし何より大きかったのは、この企画を通して様々な人とのつながりを持つことができたということだ。ここで出会わなければ、おそらくずっと関わらず卒業していたであろう人とも関わることができた。こうした人とのつながりが、私にとってこのキャンドルナイト企画での一番の収穫であったのではないと思う。

(石原真名)



上 廃油で作ったエコキャンドルと南部先生紹介パネル

下 お母さんと遊びに来てくれた地域の子ども達

市大エコキャンドルナイト

2013年1月23日(水)24日(木)

★日時:夕方5時半~7時半(雨天順延)

★場所:大阪市立大学南部ストリート

主催:文学部
表現文化論演習Ⅱ
協力:生活科学部居住学科

新東口
西口
JR阪和線
杉本町駅

南部ストリート
大阪市立大学

「市大エコキャンドルナイト」フライヤー

「上って楽しむこども階段展覧会」班 企画報告

1. 「上って楽しむこども階段展覧会」について

最初に、この企画が立ち上がった経緯を説明したい。私たちは、アーツマネジメントの目的である、普段かかわりを持たないコミュニティ同士の触れ合いを目標にしたいと考えた。ゆえに、「大学生」と普段かかわりを持たないコミュニティは何かを考えたい。そこで浮上したのが、「こども」である。わが大阪市立大学内には杉の子保育園という大学教職員の方のお子さんが主に入園している保育園がある。同じ大学内にある施設であるのに、私たちはその保育園の子供たちと接触することはほとんどない。それゆえ、私たちは杉の子保育園の子供たちとなにかアートを介してつながりを持ってもらいたいと考え、企画することにした。最終的には、より多くの子供たちと交流を深めたいと考え、以前熱帯音楽祭という企画で市大とコラボした「Ohana 遊びの学校」の子供たちと「ジャングルようちえん」の子供たちも一緒に作品を作ることとなった。なぜここの子供たちかというと、せっかく熱帯音楽祭を通してかかわりを持ったのだから、そのつながりをより深めていきたいと考えたからである。

次に、具体的になぜ学術情報総合センター（以下学情）の階段に絵を飾ろうと考えたのかを述べる。アーツマネジメントの考えとしてはコミュニティをつなげるもののほかに、何か困ったことをアートを通じて解決できないか、ということがある。私たちは身の回りで私たちに何かが改善できるようなことはないかと考えた。そこで思い当たったのが、学情の階段利用である。学情は基本的に地下1階から5階までの間のフロア間の移動は階段を利用することが勧められている。だが実際のところ、ほとんどの学情利用者がエレベーターを使って地下1階から5階を移動しているのである。普段は勿論、テスト前の学情利用が増える時期にはエレベーター前が大変混雑し、本当にエレベーターを利用しなくてはならない人が困っているという事態が起きている。ゆえに私たちはこの問題をアーツマネー

ジメントで解決できないかと考えた。

こうして「こども」と「アート」と「階段利用者を増やす」という項目が浮かび上がった。最初に構想された具体案は、こどもの絵で絵しりとりをすることであった。この案は確かに絵でしりとりをしながら階段を上がるのは楽しそうとは思われたが、やはり子供たちには自分の自由な発想で好きなように絵を書いてもらいたいと思い、子供たちに「HAPPY」というテーマで好きなように絵を書いてもらうことにした。そしてそれを階段に展示し、それを学情利用者が見ながら登ることで楽しく階段を上ってもらえるようになればよいと考え、この企画が立ち上がったのである。

(大川結以)

2. 子どもたちを通じて感じたこと

今回絵を描くにあたり、三つの団体に協力してもらった。大阪市立大学構内にある「杉の子保育園」、南田辺にあるフリースクール「Ohana 遊びの学校」、そして長居公園を拠点にし、母親たち手作りの幼稚園の「ジャングルようちえん」である。ジャングルようちえんに関しては、有志の方々に協力して頂いた。ここでは私たちがどのように子どもたちと関わっていったのかを紹介したい。

まず杉の子保育園には、交渉のために十一月に二回ほど訪問した。そこで私たちは、一つの問題に直面した。それは子どもに「何を描いてもらうか」ということである。その時はまだコンセプトが決まっておらず、子どもたちに自由に描いてもらえばよいという風に考えていた。しかし先方の保育士さん曰く、「子どもたちは、具体的な何かを提示しないと描けない」とのことであった。そこで私たちは「Happy」というテーマを打ち立て、そのテーマに沿い「虹」を描いてもらうことにした。そして実際に描いてもらったのが、一月の初旬である。スタッフの二人が杉の子保育園に赴き、男の子二人、女の子二人の計四名の園児に絵を描いてもらった。彼らには絵の具で「虹」を描いてもらったのだが、同じテーマと言えども、ひとりひとりに個性が出ていた。また虹だけでなく、女の子はかわいらしい果物

を描き、男の子はくるまや家など、少年らしさが感じられる絵を描いた。どの絵も子どもらしさや素直さが滲み出る絵となり、素晴らしい作品が完成した。私たちでは、このような無邪気さや純粋さが伝わる絵はきっと描けないだろう。そこには子どもならでの視点や発想が含まれているからである。そして絵を描いてもらった後は、私たちが子どもたちに絵本の読み聞かせをした。子どもたちはじっと話に聞き入ってくれ、そんな純真な姿に癒されたものである。

では次に、Ohana 遊びの学校とジャングルようちえん（有志）の子どもたちを紹介しよう。彼らは中川教授の紹介で、今回絵を描いてもらうことになった。すでに述べたとおり、彼らは都市研究プラザが主催した熱帯音楽祭というイベントにも参加したことがある。依頼するにあたって、私たちは一度先方に赴き、企画の説明をした。その時には子どもたちやその親御さん方も今回の企画に対して興味を示し、好意的な態度で臨んでくれた。企画を説明した後は、子どもたちと打ち解け合うために鬼ごっこなどをして遊んだ。子どもたちに翻弄される私たちであったが、そんな触れ合いを通じて彼らと徐々に仲良くなっていったように思う。

彼らには、市大に来て絵を描いてもらうことに決まった。そこで、まず絵を描くための場所が必要となった。私たちは一号館の講堂を借りようとしたのだが、企画書の提出などが遅れてしまい、最初は表現文化の学生室で描くこととなった。二回目以降は講堂を使用することができたが、このような事態を招くこともあるため、企画書などは早めに仕上げ提出すべきである。

さて、実際絵を描く段になって驚かされたのは、子どもたちの感性である。三回市大に来て絵を描いてもらったのだが、Ohana やジャングルようちえんの子どもたちは規則に縛られない自由な環境で育てられているためか、一般の保育園児とはまた違った絵が仕上がった。真っ黒に塗られた絵や形がなく色だけの絵などである。そこには子どもたちの伸び伸びとした自由な感性がうかがえた。それは垂れ幕を見ても分かるだろう。あの垂れ幕は私たちの手をほとんど借りず、子どもたちが本当に自由に

作ったものである。最終的には、私たちや先生方も目をみはるような芸術的な作品に仕上がった。大満足の仕上がりである。

このように私たちは、子どもたちと関わり、子どもたちに絵を描いてもらうことを通して、彼らの感性に触れた。彼らが見ている世界は、私たちの想像以上に豊かで独創性あふれるものであった。彼らは子供ゆえに何にも捕らわれない自由な感性をもっていると言える。そんな子どもたちに触れ合えたことは、私たち自身にも良い刺激となった。普段接することのない彼らと共に今回の企画を完成できたことは、大変素晴らしいことである。
(吉田芽生)

3. 企画を振り返って

日々、新しい課題の生まれる慌ただしい準備期間を経て、1月31日、ついに最終的な展示作業を行った。この授業は少人数であることもあり、全ての作業において、人手を集めることに苦労したのだが、この日はテスト期間にも関わらず、たくさんの方が手伝いに来てくれた。そのような方たちの協力を経て、階段が展覧会場へと変わって行く様は感慨深いものがあった。子どもたちの色彩豊かな絵が飾られていくことで、普段と同じ階段が非常に明るく、楽しい雰囲気溢れた空間になっていった。こうして、階段を使っている利用者の声実際に耳に飛び込んでくる機会がやっと来たのだ。このこども階段展覧会を通し、階段という場所に、普段とは異なる意味を付加することに成功したのではないかと感じられた。それは何故か。階段に子どもたちの絵があることによって、視線を上げて階段を降りてくる利用者がかかなり増えたからである。以前はスマートフォンをいじりながらなど、手持無沙汰な状態でただ降りるだけという人が多かった。しかし、展覧会があることで、こどもの絵について友達同士で話したり、ふと一人立ち止まって絵を眺めたりする利用者が目立った。つまりそれは、階段利用者たちが、今までの階段にはなかった新しい「意味」を見出したということではないだろうか考える。また、見る者の想像力が自然と掻き立てられる場となっていたとも言えるだろう。そこでは、まだ形のはっ

きりとしない、一見しただけでは何か分からない子どもの絵の力が大きな効果を及ぼしていたに違いない。

以上をふまえ、私たちには、どのように今回のアーツマネジメントを評価するかという課題が残っている。今回、利用者からのフィードバックとして用意したのは、以下の三つの手段だ。まず、お気に入りの作品や感想を書いてもらうなど、実際の利用者の声を聞くアンケート調査である。次に、こども階段展覧会があることによって、階段を使いたいという気持ちになったかどうか確かめるため、パネルを作り、YESかNOのどちらかにシールを貼ってもらった。こちらは評価が簡単なため、たくさんの意見が集まった。最後に、階段利用者数が普段とどのように変わるかをカウントした。これらのフィードバックはどれもまだ調査続行中であり、本稿では詳しいデータを提示することが出来ないのだが、圧倒的に「楽しくなった」という声が多かった。

また、以上のような階段利用者からの評価も一つの判断基準であるが、より重要となるのは、この展覧会に参加してくれたアーティストである杉の子保育園や Ohana、ジャングルようちえんの子どもたちや保護者の方々からの意見であろう。普段接することのない大学生や大学というコミュニティと関わることで、彼・彼女らに何か変化が起きたのか。それらを含めて、このプロジェクトを多面的に評価、分析をしていく必要がある。

今回のアーツマネジメントを通して、強く感じたことがある。それは、「アート」という手段を通して人びとが関わることにより生まれる大きな可能性だ。この授業の受講生、先生方、学術情報総合センターの職員や大学関係者の方々、参加アーティストである杉の子保育園や Ohana、ジャングルようちえんの方々、誰もが皆、普段から近接した地域にいるにも関わらず、実際に接することはほとんどなかった。それどころか存在さえも意識していなかった人が多々いるだろう。しかし、それらの異なるコミュニティに属する人々が、大学という場所で「アート」を介在することにより、確かに繋がった。また、展覧会を目にすることとなった学情利用者も、間接的にはあるが、異なるコミュニティと繋がる経験をするようになった。

このことは、こども階段展覧会だけでなく、キャンドルナイトにも同様に言えるだろう。学術情報総合センターや南部ストリートといった場所で「アート」を手段として様々な人々が関わり、普段接することのないコミュニティが「繋がる」ことによって、思いもかけないような新しい「意味」がたくさん創出されていくことになったのだ。そこには、「楽しさ」や「癒し」といった単純な感情だけでなく、問題解決のための糸口や多かれ少なかれ関わった人々のこれからの人生や考え方に変化をもたらす要素もあった。つまり、アートマネジメントには今このときだけの効果ではなく、「未来」に向かった意味を生む可能性が大いに宿っていると感じられたのだ。「未来」に対する新しい「意味」の創出、それはアーツマネジメントの目的の一つであり、このこども階段展覧会もそうしたアーツマネジメントの効果が十分に感じられる実践となったと言えるだろう。

(辻西さやか)



こども達が描いた大きな垂れ幕



「上って楽しむこども階段展覧会」フライヤー